

Ⅶ. 協同的探究学習を用いて主体的に探究する生徒を育てる

第1章

協同的探究学習を用いた授業実践

石川久美

(1) 仮説

理解・思考型学習である協同的探究学習は「わかる学力」を育成するのに適した方法である。課題研究に取り入れることで、因果関係について自分の考えで説明する力や、課題の本質を理解し、多元的・長期的に考える力を育成することができる。既存教科で身につけた各教科内の「わかる学力」と、SS課題研究の中で身につけた教科横断型の「わかる学力」の相乗効果により、主体的な学びへと生徒が変化し、理解・思考・表現力が高まると考えた。

ドリル演習などで決まった解法を暗記することで身につけた学力（「できる学力」）だけでは、問題の本質を理解することができない。本校では、このような「できる学力」に対して、物事の本質を捉え、他者と協同しながら問題解決に向かうことのできる力を「わかる学力」と呼んでいる。「できる学力」「わかる学力」という概念規定や「協同的探究学習」の理念は、藤村宣之教授（東京大学大学院教育学研究科）によるものである。

(2) 実践

各教員が場面に応じて実践するのみでなく、2週間に一度、東京大学大学院教育学研究科の藤村宣之先生に来ていただいて授業観察も行っている。

SS課題研究のSTEAM（1-Ⅲ-4で紹介）では、生徒が決めた研究テーマを研究していく訳であるが、それぞれの研究を進めるだけでなく、グループ内発表や「自然と科学」「生活と科学」「心身と科学」「創造と科学」という4つの領域に分かれた中間発表会を行った。そして、発表会で学んだことを活かして自分の課題研究の軌道修正を行った。

いずれの教科においても、授業展開としては、個別探究→集団による探究→再度の個別探究という流れとなる。“生徒がお互いの考えを聞き、その共通点や相違点を考えながら、知識を関連づけることで理解を深める”という学習過程を用意することが協同的探究学習の本質である。実践の詳細は、SS課題研究については1-Ⅲ、1-Ⅳで、各教科の取り組みについては、1-Ⅶ-2で紹介する。

(3) 評価

協同的探究学習を取り入れると、一斉に伝達する形式の授業よりも時間がかかる。しかし、生徒が深く理解することができれば、その後の学びに要する時間を短縮することができる。このため、どの場面で協同的探究学習を取り入れるかが重要なポイントである。そこで、多くの実践を行ってきた教員から新しく赴任してきた教員へ伝達する機会を設けた。

課題研究における協同的探究学習は、友人の探究方法を参考にして自分の研究の方向を再考・修正できる。また、自分の研究を客観視する力と批判的に考える力を身につけることができる。しかし、既存教科に比べると協同探究から個別探究へのフィードバックにおいて生徒間の差が生じやすい。この点にどのように対応するかを考える必要がある。（文責 石川久美）